

## 空港のある町

清水希容子

一般財団法人日本経済研究所 地域未来研究センター 研究主幹

「港」には、鉄道の「駅」が線路伝いに行き先が固定化されているのと異なり、空や海を介してどこにでも行くことができる無限のひろがりを感じる。そう考えると、飛行機の「港」は、国内外の航路設定が自由で、世界中の都市とつながることが可能である。

その出入り口が、ターミナルビルになる。広々として異空間の雰囲気醸した空港は、他の都市から訪れる人を最初に出迎える玄関だ。2010年11月にオープンした羽田空港の新国際線ビルには、江戸の町を再現した和の空間がみごとに演出された。本来、ターミナルビルとは、ひと時の待合や土産売り場がある通過駅ではなく、人と人、人と地域、人と文化が初めて出会うところでなければならない。

現在、ほぼ一県に一つの空港があり、民間航空会社の定期便が就航している空港は、54に上る（離島航路の26を除く）。1952年の羽田を皮切りとして、伊丹、名古屋、福岡、札幌の主要空港ができ、高度経済成長期にはそれらを除く33の地方空港が新たに開港した。その後一段落したが、90年以降再び14の地方空港が開港している（地図参照）。

最近、たんちょう釧路空港、高知龍馬空港、徳島阿波おどり空港、対馬やまねこ空港、富士山静岡空港、米子鬼太郎空港、出雲縁結び空港など、地域自らの発案で、まちの誇りや特徴を空港名につけ親しみをもたせている例が増えている。時刻表などの記載や機内アナウンスなどパブリシティ効果を考えれば、それだけで地域の誇りやPRとなる。地図のとおり、地方空港の所在は、多くが名のある大きな町ではない。ならば、このように“空港のある町”をもっと積極的に活かせないか。

“米子鬼太郎空港”は、鳥取県境港市に在る。2010年4月、境港市観光協会の発案から改名され

た。名前は、比較的少ない費用で法的規制もなく変更できる。通称“べとべとさん駅”のJR米子空港駅から鬼太郎列車で15分、水木しげるロードのある境港駅（通称鬼太郎駅）に着く。そこから徒歩800m、かつて北前船の回船間屋などで栄えた港の近くの通りに、139体の妖怪ブロンズ像、一反木綿の鳥居の妖怪神社、老舗料亭を改築した水木しげる記念館、生家、下駄や弓浜緋を売る店などが並び、FMラジオから妖怪ブルースが流れる。

周辺には、今年のNHKの朝ドラの舞台の安来市、出雲大社などがあり、広域的に観光客を取り込める。子供からお年寄りまで、今年の訪問者は約370万人近い。妖怪は、JRの車両、隠岐島行フェリー、自衛隊美保基地の航空機（期間限定）、バスにも描かれ、遊び心とにぎわいの連鎖が愛称化につながった。

空港ビルは、昨年末に改装され、地域との関わりをさらに深めている。鬼太郎をモチーフにした育児室、地元弓ヶ浜をイメージした床の模様、白砂青松の名がついた会議・待合室、鬼太郎空港交番まで登場した。女性用洗面所の充実に気を配り、駐車場を無料化するなど町のリビングとして気軽な雰囲気づくりがなされる。地方空港では珍しく、地元の居酒屋が出店したり、地域発の氷温技術による海産物販売、出発ロビーの吹抜空間を有効利用した展示スペースを設けたりした。

米子空港ビル株式会社の竹本克彦専務は、「改装から1年が経ち、航空機利用以外のお客様も目立つようになった。地元と一緒に考え、山陰を代表するターミナルに相応しい面構えにしていきたい」と語ってくれた。

空港のある町は、大きな空や広い海の向こうのまだ見ぬ世界中の未来とつながっている。

